

『学宮図説』にみる学校・孔子廟

ー成立背景と建築要素の受容・再編および配置構成の検討ー

王一臻

『学宮図説』は、明末に来日した朱舜水が日本の工匠と協働して編纂したものであり、中国儒教学校の理念と構成を、建築配置・様式・寸法として体系的に示した点に特色を有する。模型の制作（現存せず）を含め、本書は理想的学校像を具体化した試みと位置づけられる。現存する『学宮図説』は、図面が縮小され、本文とともに『舜水朱氏談綺』（宝永5年刊）に収録されたものである。

従来研究には一定の蓄積があるものの、その位置づけや木割体系、指図の解釈にはなお再検討の余地がある。本研究では、史料の成立背景を再検討するとともに、内容を精査し、寸法体系と構成原理の整理を試みる。諸史料によれば、本書は江戸・水戸藩における学校・孔子廟建設構想を契機として編纂され、造営指導を意図していた可能性が示されるが、江戸前期における実際の造営への影響は限定的であった。一方で、『三才図会』をはじめとする類書の図様がより早期に名古屋・湯島の聖堂に影響を与え、その後、湯島聖堂寛政期再建や延方郷校聖堂などにおいて、本書の影響が部分的に認められる可能性がある。また、玉川大学所蔵の「朱舜水計画孔子廟指図」は、『学宮図説』の原図または草図に相当する史料とみられる。

内容分析の結果、柱・垂木を基準とする比例体系に基づきつつ、多くの部材が絶対寸法によって規定され、瓦・金具・絵様に至るまで詳細に記述されていることが確認される。すなわち、本書は木割書と仕様書の中間的性格を有し、造営指導としての性格が強いと考えられる。また、椽架の導入、伏蓮華形礎石、古老銭形棟、丸材垂木・丸桁、黄檗天井や捲簾の採用など、浙江地方を中心とする大陸建築様式を受容しつつ、その適用過程には工匠による調整が認められる。さらに配置構成においては、明代地方官学制度を踏まえながらも、試験施設の導入や三方を囲む水系としての泮池など、独自の理念に基づく再構成が確認される。